武蔵野日曜聖書講筵

無者修業
――マルコ伝第９章19～37節――

１９９５年10月８日

本当の無者はイエス・キリスト　キリストに圧倒されて生きる　キリストに降参　キリストを
全存在で受けとる　聖霊の火をくだす　われら互に相愛すべし　キリスト一切の歩き方　幼児
の如くならずば

【マルコ９・19～37】

19爰に彼らに言い給う『ああ信なき代なるかな、我いつまで汝らと偕におらん、
何時まで汝らを忍ばん。その子を我が許に連れきたれ』20乃ち連れきたる。
彼イエスを見しとき、霊ただちに之を痙攣けたれば、地に倒れ、泡をふきて
転び廻る。21イエスその父に問い給う『いつの頃より斯くなりしか』父いう『お
さなき時よりなり。22霊しばしば彼を火のなか水の中に投げ入れて亡ぼさん
とせり。然れど汝なにか為し得ば、我らを憫みて助け給え』23イエス言いた
もう『為し得ばと言うか、信ずる者には、凡ての事なし得らるるなり』24そ
の子の父ただちに叫びて言う『われ信ず、信仰なき我を助け給え』25イエス
群衆の走り集るを見て、穢れし霊を禁めて言いたもう『唖にて聾者なる霊よ、
我なんじに命ず、この子より出でよ、重ねて入るな』26霊さけびて甚だしく
痙攣けさせて出でしに、その子、死人の如くなりたれば、多くの者これを死
にたりと言う。27イエスその手を執りて起し給えば立てり。28イエス家に入り
給いしとき、弟子たち窃に問う『我等いかなれば逐い出し得ざりしか』29答
え給う『この類は祈に由らざれば、如何にすとも出でざるなり』
30此処を去りて、ガリラヤを過ぐ。イエス人の此の事を知るを欲し給わず。
31これは弟子たちに教をなし、かつ『人の子は人々の手にわたされ、人々こ
れを殺し、殺されて、三日ののち甦えるべし』と言い給うが故なり。32弟子
たちは、その言を悟らず、また問う事を恐れたり。33斯てカペナウムに到る。
イエス家に入りて、弟子たちに問い給う『なんじら途すがら何を論ぜしか』
34弟子たち黙念たり、これは途すがら、誰か大いならんと、互に争いたるに
因る。35イエス坐して、十二弟子を呼び、之に言いたもう『人もし頭たらん
と思わば、凡ての人の後となり、凡ての人の役者となるべし』
36斯てイエス幼児をとりて、彼らの中におき、之を抱きて言い給う、37『お

およそ我が名のために斯(かか)る幼児の一人を受くる者は、我を受くるなり。我を受くる者は、我を受くるにあらず、我を遣(つかわ)しし者を受くるなり』

●本当の無者はイエス・キリスト

秋というのは非常に魂が澄んでくる。私は、春はうきうきするけれども、秋が一番しっくりと気持にあう季節のように感じております。夏は暑いし、冬は寒いし、秋が一番からだにしみこんでくる。

今日は「無者修業」という面白い題にしました。「修業」の「ぎょう」の字は普通は「行」と書きますが。無者修業を完全に行じたひとはキリストです。キリストは神さまのほかに何もない。彼は「無者」なんです。本当の無者はイエス・キリストなんだ。何も己の無いひとです。「無」という言葉は非常に東洋的な真理を表す素晴らしい言葉です。西洋の世界は「有」の世界です。東洋は無の世界。無の世界の方が深いし高い。だから、西洋文化よりも東洋の、仏教の世界には大事なものがある。キリスト教はどうかというと、有の方です。

ただし、イエスは有の世界で本当の無を知ってるひと、無を生きたひとです。神さまの他に何もないんですから、自分は無いのだから、イエス・キリストは本当の無者なんです。キリストは本当の無者です。イエスは西洋の例外者です。西洋と言ったって、パレスチナですけれども。

「我を見し者は父を見しなり」

ということをはっきり言えた人はキリストの他にいない。

「自分を見た者は神さまを見たのだ」

と。神さまの完全な映し絵です。神さまが乗り移っているわけです。これが本当の神人なんだ。自分が無者だから、本当の神人はイエス・キリストです。だから、我々の信仰（信行）の世界は無者修業なんだ。私が今日書いたのはそのことなんです。キリストのように本当に無者であるかと、その修業が我々の信仰生活です。

●キリストに圧倒されて生きる

「しんこう」というのは、信じ仰ぐ「信仰」ではなく、信じ行く「信行」と書かなければダメです。

「私には信仰はありません」

と言う。自分の信仰を問題にしているうちは、いつまでたっても相対的世界で、どうにもならん。

「信仰なき我を憐れみたまえ」

という、あれが本当なんです。信仰の無いのがいい。そうすると、神・キリストに圧倒される。神・キリストに圧倒されて生きることが本当の我々の生き方なんです。

「自分の信仰」
なんて言っているうちは、いつまでたってもダメです。
こんなことを言う人は、普通の教会の牧師さんにはいないだろうね。普通は、
「もっと信仰を深くしなさい」
だとか、
「聖書の勉強が足りません」
だとか言う。そんなことではいつまでたっても始まらない。私はテレビでいっぺん話をしたいくらいです。私が話したら、みんなびっくりするだろうね。普通の牧師さんの言うようなことは言わないから。
「とんでもない野郎だ」
と、皆が言うだろう。その「とんでもないやつ」が本当のことを言っている。パウロやヨハネやイエス・キリストが天界で
「そうだ、その通りだ」
と私に言っておられる。聖書は研究して分かるような世界ではない。また分かったってどうにもならないような世界です。
聖書は身読(しんどく)しなければ。からだで読む。全存在で読まなければ、聖書の世界には入れない。だから、これは読み入るんです。入らなければダメです。対象的に読んでいたってダメです。自分がその中に入って、キリストと一つになる、パウロと一つになる、ヨハネと一つになる。そういう読み方をしなければダメなんです。
私は自分の魂の在り方を告白しているので、あなた方にお説教なんかしているのではない。告白です。講義ではない。自分の体験をお話しているだけのはなしです。武蔵野幕屋にいらっしゃっているあなた方は本当に恵福なるかなです。私は自分でもはっきり――自分を言っているのではない――キリストを語っている。キリストに圧倒されている。自分の信仰なんか問題にしたら、いつまでたっても始まりません。
パウロもキリストに圧倒されて生きていた男です。ヨハネはキリストの中に入ってしまっているようなやつだ。ペテロはちょっと波みたいで出たり入ったりしたところがある。ヨハネ書とパウロ書翰と黙示録はよく読みなさいよ。聖書くらい楽しい本はない。読んでいて力がきてしょうがない、光が来てしょうがない、生命が来てしょうがないという「しょうがない」世界です。西郷南洲が
「仕様がないやつが本当だ」
と言ったのは、そのとおりです。南洲自身がしょうがない男だった。聖書はそういう現実です。「信仰」なんかいらない。これは現(うつつ)の世界だから。現実の世界です。聖書の現実に入らないで、なにが聖書か。
「聖書読みの聖書知らず」

ということになってしまう。

アメリカの詩人のサムエル・ウルマンという人の『青春』という文章があるけれども、これでもちょっとまだ足りない。むしろ、禅宗の『碧巌録（へきがんろく）』という本は素晴らしい本です。私のドイツ語の先生であったグンデルトというドイツ人は碧巌録が好きで、碧巌録をドイツ語に訳した。

「日本人はこういう本を読まなくてはダメだ。いわゆるキリスト教はダメだ」

と、彼はヨーロッパのキリスト教をけなしていた。

中世の神秘家のエックハルトは素晴らしい。それからアッシジのフランチェスコ。あそこらは本ものです。ルターももちろん本ものですけれども、ルターはかなり理屈っぽいところがある。それでも、カルビンよりかずっとルターの方が直覚的です。カルビンは理屈のほうだ。カルビンはスイスの人だけれども、フランスやイギリスの方に広がっていった。

●キリストに降参

我々は無者修業です。キリストは徹底的な無者でしたから、神一切であった。我々は、キリスト一切です。我々は直接に神一切にはなれない。神の現象体であるところのキリスト、イエス・キリスト一切なんだ。「一切」ということは

「圧倒される」

ということです。キリストに圧倒されて生きている。自分の信仰でも何でもない。

「参りました！」

と言って降参すると、キリストの世界に入れる。降参しないで、

「分かるの、分からないの」

なんて、そんなことを言ってたら、いつまでたってもダメなんだ。「参りました」と言うこと。福音書のキリストの言葉や行いを見て、

「降参しました！」

と言うと、キリストの中に入っていく。キリストの中に入れられる。そういうことですよ、聖書というのは。解釈でも何でもない。だから、私はありがたくてしょうがない。力がきてしょうがない。光がきてしょうがない。そういうわけです。聖書くらい素晴らしい本はない。

これは本ではない。ナポレオンがセントヘレナに流されて聖書を読みなおしたら、

「これは単なる本ではなかった。これは生きものだ。参りました」

と言った。さすがはナポレオンだ。彼はセントヘレナでキリストに降参したときに初めて本当の聖書の世界に入った。大英雄ナポレオンが降参したんだ。パウロさんに、ペテロさんに、ヨハネさんに、ましてキリストに降参した。そういう凄い世界だ。だから、あなた方は、

「参りました！」

と言って聖書の――言葉ではない――言葉が表しているところの現実に降参すると、その世界に入れられる。そうすると、力がくる、生命がくる、光がくる。聖書というのはそういう本ですよ。

●キリストを全存在で受けとる

マルコ伝９章に入ります。

19 爰に彼らに言い給う『ああ信なき代なるかな、我いつまで汝らと偕におらん、何時まで汝らを忍ばん。

素晴らしいね、イエス・キリストは。もうあきらめてしまっている。今のキリスト教界に対してキリストは、

「聖書研究会なんてよせ、からだで読め。研究なんかしてはダメだぞ」

と言っておられる。

その子を我が許に連れきたれ』20 乃ち連れきたる。彼イエスを見しとき、霊ただちに之を痙攣けたれば、地に倒れ、泡をふきて転び廻る。

まぁ、大変なひとだね、イエスというのは。キリストは何もしないのに、イエスを見ただけで、もうキリストから力がきているから、光がきているから、こういう状態になってしまった。

21 イエスその父に問い給う『いつの頃より斯くなりしか』父いう『おさなき時よりなり。22 霊しばしば彼を火のなか水の中に投げ入れて亡ぼさんとせり。

これは悪霊だね。

然れど汝なにか為し得ば、我らを憫みて助け給え』23 イエス言いたもう『為し得ばと言うか、信ずる者には、凡ての事なし得らるるなり』

これは非常に大事な言葉。「為し得ば」なんていう仮定的な言い方はダメだというわけです。

「信ずる者には、凡ての事なし得らるるなり」

とある。

「真にキリストを受けとる者には、全存在で受けとる者には、凡ての事がなし得らるるなり」

ということです。私は「信ずる」とは言わない。体受です。からだで受けとる。全存在で受けとる。「信ずる」という言葉が躓きになる。

「ああ信仰か」

なんて、人はすぐそう思う。イエスはそんなつもりで「信ずる」と言ってらっしゃるのではないけれども、イエスのこの「信ずる」は、いわゆる「信ずる」ではダメです。キリストは「信ずる」という言葉をそういう意味で仰ったのではない。体受、からだで受けとる、

全存在で受けとること。全存在で受けとる者は、もうそこにもの凄い力がくるから、何でもできる。「凡ての事」というのは

「その人が願うところのすべて」

ということで、一般的に言っているのではない。

キリストを受けとったならば、その瞬間に霊的には、それがもう為し得ているんです。現象的にいつそれが為し得るような現象となるかは別な問題です。根源現実においては、それは成っている。根源の現実では成っている。それが本当の受けとり方です。

「私は信じているんですが、果たしてどうでしょうか」

なんていうのは、ひとつも信じているのではない。現象は、出てこようが出てこまいが、根源においてはそれは成っている。これが本当の「信ずる」という意味です。体受する者は、身体で受けとる者は、病気になっても治っている。

「キリストの力で私はもう治っています」

というところに入る人は、病の方がその魂の力に制せられて消えていく。医学的にどうのこうのではない。癌も消えてしまう。

病気のお母さんのために本当に祈った或る青年がある。そしたら、お母さんの癌が消えてしまった。そういう現実がある。私にその青年が話してくれた。

「私は驚きました。祈ったら、お母さんは治ってしまった」

「それは君の信仰が本ものだったからだ」

と。キリストの霊を宿していれば、病はとっつかない。病の方で逃げていく。皆さんはそれだけの、いわゆる信仰ならざる信仰をもって生きてくださいよ、

「病なんかとっつくか」

と言って。烈々たる聖霊の力が、光が病を退散させてしまう。

●聖霊の火をくだす

私は「烈々」という言葉が好きだ。この「烈」の字の四つの点は何かというと、火なんです。ルカ伝の12章で、キリストが

「我は火を投ぜんために来たれり」

と仰った。あの「火」というのは聖霊のことです。

「我は火を地に投ぜんとて来(きた)れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。されど我には受くべきバプテスマあり。

十字架のことです。

その成し遂げらるるまでは思い逼(せま)ること如何許(いかばかり)ぞや。」（ルカ12・49）

「十字架で贖罪の死を遂げたら、今度は、聖霊の火をくだすぞ」

ということです。だから、キリストの恵みは十字架の贖いと聖霊の火です。これを両方と

も離さないで受けとることが、本当にキリストを受けとることになる。十字架のキリストと聖霊のキリスト。これを分けてはダメです。

「十字架・聖霊」

は離すことのできない関係にあります。我というものを贖いとったのが十字架。そこへもっていって、不滅の生命をくださるのが聖霊です。聖霊の生命です。十字架と聖霊とは離してはダメです。

日本人は、正しい意味で信仰のある人は少ないし、しかも、その信仰が本ものである人がまた少ない。困ったものだ。

私はいわゆる牧師さんの言うようなことは言わない。それは、私はただ圧倒されている人間だからなんです。

「自分がどうのこうの」

と、そんなことは考えていない。キリストの十字架と聖霊に圧倒されているだけです。ありがたくてしょうがない。パウロがそういう男だった。

「キリストわが中に。われキリストの中に」

とパウロが言っているでしょ。中に入ってしまっている世界です。

●われら互に相愛すべし

ヨハネという人は愛の人だ。ヨハネ第一書の3章でこう言っている。

「8**罪を行うものは悪魔より出づ、悪魔は初めより罪を犯せばなり。神の子の現れ給いしは、悪魔の業を毀たん為なり。9凡て神より生まるる者は罪を行わず、神の種その衷に止まるに由る。**

素晴らしい言葉だね。

彼は神より生まるる故に罪を犯すこと能わず。……

「神より」とは、我々にとっては「キリストより」ということです。人間は躓いたり転んだりする。けれども、本質的には罪を犯していない。そういう人間にされている。「罪を犯す」というのは

「自己をたてる、自我中心になる」

ということです。

16主は我らの為に生命を捨てたまえり、之によりて愛ということを知りたり、我等もまた兄弟のために生命を捨つべきなり。」（ヨハネ一3・8…16）

このヨハネ第一書3・16は大事な言葉です。また、ヨハネ伝の3・16も大事なところです。

「16**それ神はその独子を賜うほどに世を愛し給えり、すべて彼を信ずる者の亡びずして永遠の生命を得んためなり。」（ヨハネ3・16）**

これも素晴らしい言葉です。キリストを賜うほどに世を愛したまえりという。このしょ

うがない罪の世を愛した。「愛する」というのは、ただ感情的に愛するのではない。それを救うこと、「世を救った」ということです。

「主は我らの為に生命を捨てたまえり、之によりて愛ということを知りたり、我等もまた兄弟のために生命を捨つべきなり。」（ヨハネ一３・16）

これは凄いことを言っている。福音の真理は、頭で分かるとか分からないとかいう世界ではない。実践して初めて分かる。これはドイツの大詩人ゲーテも、

「本当にものごとを分かるためには――頭で考えたり分かったりするのは本当の世界ではない――自分で本当に実践してみなければ」

と言っている。行為的な知なんです。自分の実存で、行為ではじめて身体で感ずる。それが本当の知り方だという。旧約聖書の「知る」という言葉はそういう意味の言葉です。新約でも同じことです。頭で知ることは決して聖書のいう「知る」ではない。旧約ではホセア書が一番それをよく言っているところです。

「18若子よ、われら言と舌とをもて相愛することなく、行為と真実とをもて為べし。19之に出りて我ら真理より出でしを知り、且われらの心われらを責むるとも、神の前に心を安んずべし。20神は我らの心よりも大にして一切のことを知り給えばなり。21愛する者よ、我らが心みずから責むる所なくば、神に向いて懼なし。22且すべて求むる所を神より受くべし。是その誡命を守りて御意にかなう所を行えばなり。23その誡命はこれなり、即ち我ら神の子イエス・キリストの名を信じ、その命じ給いしごとく互に相愛すべきことなり。24神の誡命を守る者は神に居り、神もまた彼に居給う。我らその賜うところの御霊に由りて、其の我らに居給うことを知るなり。」（ヨハネ一３・18～24）

ヨハネ第一書の３章というのは大事なところです。そしてまた、大事なところは４章７節からです。

「7愛する者よ、われら互に相愛すべし。愛は神より出づ、愛はキリストより出づ、ということです。聖書の世界では、「キリスト」ということを直接にはあまり言わないで「神、神」と言っているけれども、我々は神を現したキリストをその「神」という言葉の背後にちゃんと読まなくてはいかん。

おおよそ愛ある者は、神より生まれ、神を知るなり。8愛なき者は、神を知らず、神は愛なればなり。9神の愛われらに顕れたり。神はその生み給える独子を世に遣し、我等をして彼によりて生命を得しめ給うに因る。10愛というは、我ら神を愛せしにあらず、神われらを愛し、その子を遣して我らの罪のために宥めの供物となし給いし是なり。11愛する者よ、斯のごとく神われらを愛し給いたれば、我らも亦たがいに相愛すべし。12未だ神を見し者あらず、我等もし互に相愛せば、神われらに在し、その愛も亦われらに全うせらる。13

神、御霊を賜いしに因りて我ら神に居り、神われらに居給うことを知る。14
又われら父のその子を遣して世の救主となし給いしを見て、その証をなすなり。15凡そイエスを神の子と言いあらわす者は神かれに居り、かれ神に居る。
16我らに対する神の愛を我ら既に知り、かつ信ず。神は愛なり、愛に居る者は神に居り、神も亦かれに居給う。17斯く我らの愛、完全をえて審判の日に懼なからしむ。我等この世にありて主の如くなるに因る。18愛には懼なし、全き愛は懼を除く、懼には苦難あればなり。懼るる者は、愛いまだ全からず。
19我らの愛するは、神まず我らを愛し給うによる。20人もし『われ神を愛す』と言いて、その兄弟を憎まば、これ偽者なり。既に見るところの兄弟を愛せぬ者は、未だ見ぬ神を愛すること能わず。21神を愛する者は亦その兄弟をも愛すべし。我等この誡命を神より受けたり。」（ヨハネ一４・７～21）

キリストを愛することと隣人を愛することは同じだ、離すことができない、というのと同じことです。

この召団の中ではそういう愛が皆さんの間でもって本当に溶けあっていなくては、本当の召団ではない。すぐ批評をしたり、「誰がどう言ったこう言った」と、そんな下らないことを言っているうちはダメです。「愛する」という言葉の奥には「ゆるす」という言葉もあります。大きく容れることです。我々は本当のキリストの愛でお互いに愛しあって、また助け合っていく。武蔵野集会はそういう楽しい所である。天的な楽しさがここに、皆さんの間におのずから流れている。それが本当の召団のすがたです。

●キリスト一切の歩き方

マルコ伝９章にもどります。

23イエス言いたもう『為し得ばと言うか、信ずる者には、凡ての事なし得らるるなり』24その子の父ただちに叫びて言う『われ信ず、信仰なき我を助け給え』

これは正直な告白ですね。こういう逆説的な言い方、

「われ信ず、信仰なき我を助け給え」

とは本当の告白です。いわゆる自分の信仰なんかを問題にしていないのが「信仰なき我」です。それは助けられる。

「信仰なき我を助けたまえ」

というのは平伏しの姿です。魂が平伏している。キリストの前に平伏さなければダメです。

「自分はクリスチャンである。キリストを信じています」

なんていうクリスチャンはダメです。キリストの前には無条件に平伏している。自分の信仰なんか問題にしていない。それが本当の「信なき我」です。逆説的に言いますと、その「信

なき我」は本当の信をもっている。

今、この部屋には電灯が光っているけれども、電灯がなかったら、太陽の光が入ってくる。光なき所に光がある、太陽の光が。無き所に入ってくる。信無きところにキリストの力が入ってくる。そういうことです。闇の世界に光が入ってきて、闇を滅ぼして光の世界にする。光は闇に勝つ。レンブラントの絵に、一角からスーッと光が射している絵がある。あれは闇に打ち勝つ光の世界を象徴的に表している。彼の絵というのは闇と光の交錯しているような世界です。

我々の生活は無者修業なんです。キリストは無者です。我々はキリストと同じ質の歩き方をしていきたい。キリストは神一切ですが、我々はキリスト一切です。キリスト一切の歩き方をするのがこの無者修業です。神一切の人は、本当の無者はキリストだから。『キリストにならいて』という本がある。真似することではない。キリストを生きれば、質的にはおのずからそうなる。問題は、質が問題で、量ではない。

「われ信ず、信仰なき我を助け給え」

とは、

「私は受けとります。受けとりそこないの私を助けてください」

ということです。「信ずる」とか「信仰」という言葉が躓きになるから、私はあまり使いたくない。「受けとる」でいい。全存在で受けとることが本当の「信ずる」なんだ。心理的にただ信ずるということではない。

●幼児の如くならずば

９章の終りの方にいきます。

33斯(かく)てカペナウムに到る。イエス家に入りて、弟子たちに問い給う『なんじら途(みち)すがら何を論ぜしか』34弟子たち黙念(もくねん)たり、これは途すがら、誰か大いならんと、互に争いたるに因る。

弟子たちはバカなことを言うんだ、誰が偉いかと。そういうような比較研究をするうちはダメなんです。

35イエス坐して、十二弟子を呼び、之に言いたもう『人もし頭(かしら)たらんと思わば、凡(すべ)ての人の後(しりえ)となり、凡ての人の役者(えきしや)となるべし』

このキリストの御言は

「どん底に立て。そして、みな担い上げてしまえ」

ということです。アトラスみたいに。どん底の人間になれということです。どん底にちゃんといろと。どん底の人が本当はみな担いあげてしまう。

「どん底の人であれ」

ということは

「無者であれ」
ということです。

36 **斯てイエス幼児(おさなご)をとりて、彼らの中におき、之を抱きて言い給う、37『お**
およそ我が名のために斯(かか)る幼児の一人を受くる者は、我を受くるなり。我を
受くる者は、我を受くるにあらず、我を遣(つかわ)しし者を受くるなり』

ここのところは素晴らしい言葉です。神さまは幼児を愛する。キリストは、

「**幼児(おさなご)の如くならずば天国に入れない**」

と言われた。とかく人間は理屈っぽくなったり、色々な比較をしてみたりでダメだと。幼児は本当に純真だから、幼児のように単純で純真であれということです。幼稚園の子供は先生が言うことはみな無条件に喜んで受けとる。ああいう姿です。比較研究なんかしない。幼稚園に子供を迎えにいって、その子の名前を呼ぶと、急いで走ってやってくる。あれが本当に

「幼児の如く」

という幼子の純真さなんです。だから、

「**幼児(おさなご)の如くならずば**」

というわけです。

「**およそ我が名のために斯(かか)る幼児(おさなご)の一人を受くる者は、我を受くるなり**」

という。小さい者、弱い者を本当に憐れみ愛する、そういう心は実は私を受けたのだと。キリストはそういう、非常にこまやかな深い愛をもっておられた。また反面では、サタンはどんなに怒っても、キリストはサタンに打ち勝ちたもう。本当の勇者というものはもの凄い力と非常に優しい心の両方をもっている。これが本当の勇者です。こういう言葉は普通の哲学者にも文学者にも言えない。イエス・キリストは権威と、それからどん底の愛の方ですから。イエスというひとは大変なかたです。私はもう言いようがないから、

「大変なひとだ」

と言う。ただ、愛という言葉でも言い尽くせない。もの凄い義をもっている。義と愛が渾然としている。イエスというひとは英雄の如く、また乙女のごとしです。

福音書のキリストの言・行に、これに本当に自分を投げ入れて読む。これが一番大事なことです。そうすると、キリストと一つになる。これが本当の信の世界です。「信」は今度は「真」になる。真(まこと)の世界だ。これは「真理」ではない。「理」というと観念的になる。そうではなくて、本当の「まこと」の世界です。本当の「うつつ」の世界、根源的な現実、霊的な根源現実です。

聖書というのは大変な本だ。告白する他しようがない。私は決して説明なんかしない。私はあなた方に告白しているだけです。